

イベント情報

申込みは大安場史跡公園
ガイダンス施設へ直接かお電話で。



和紙の凧をあげよう

和紙で凧を作って、
芝生であげてみましょう。

日時 ●平成28年1月17日(日)
午前9時～正午
定員 ●30名(小学生以下は保護者同伴)
参加費 ●600円(材料代)

※作業のできる服装で
ご参加ください。



草木染め

自然の草木を用いて
ストールを染めてみましょう。

日時 ●平成28年1月24日(日) 午前10時～正午
定員 ●20名(中学生以上)
参加費 ●2,000円(材料代)

※エプロン・タオル・
ゴム手袋を持参ください。



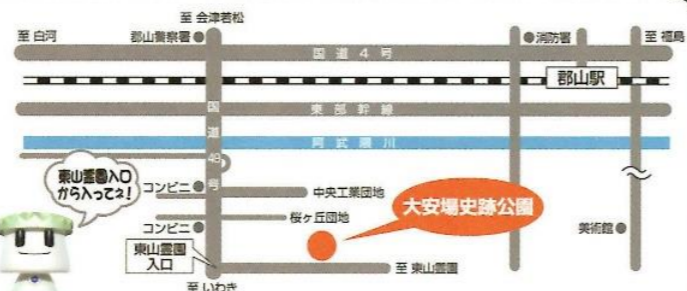
蘇芳で
赤く染めて
みましょう

大安場史跡公園

指定管理者:公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

住所:福島県郡山市田村町大善寺字大安場160番地
電話:024-965-1088 FAX:024-965-1090
Mail:oyasuba@bunka-manabi.or.jp
休館日:月曜日(月曜日が祝日の時は次の休みでない日)
※公園は年中無休です。

ウェブサイトも
チェック!
大安場史跡公園 検索



紙へリサイクル可
この紙はFSC®認証紙です。



大安場史跡公園

まる さんかく しかく

vol.
26

発行
平成27年12月27日

第2回 歴史講座



郡山に お城が造られた時代

郡山市内にあるお城の発掘事例などを紹介し、その時代を解説します。



■日時/平成28年2月7日(日)
午後1時30分～午後3時
■対象/中学生以上
■定員/50名
■講師/大安場史跡公園管理センター職員
■参加費/無料
■申込み/平成28年1月7日(木)
午前9時から電話またはガイダンス施設で受付



タイトルはまるい石訓、さんかくは古墳の前方部、しかくは後方を表現しています。

平成27年度 大安場史跡公園 市民鑑賞型事業

大安場史跡公園 平成27年度
歴史講座

「郡山に
お城が造られた時代」

大安場史跡公園 平成二十七年年度 第二回歴史講座

2月7日(日)
午後1時30分～3時

場所:大安場史跡公園ガイダンス施設
対象:中学生以上
定員:50名(事前申し込み先着順)
内容:お城の発掘調査成果を紹介し、その時代を解説いたします
講師:大安場史跡公園管理センター職員
参加費:無料
申込開始:1月7日(木)午前9時から
電話またはガイダンス施設にて受付
※申込開始当日は電話回線が混みあう場合がございます
あらかじめご了承ください

主催:郡山市/郡山市教育委員会
大安場史跡公園管理センター
(公益財団法人郡山市文化・学び振興公社)

【お問合せ】大安場史跡公園管理センター TEL:024-965-1088 FAX:024-965-1090
〒963-1161 福島県郡山市田村町大善寺字大安場160番地
http://www.bunka-manabi.or.jp/oyasuba

じゅうにし
十二支の考古学
 さる
—申—

平成28年1月5日(火)～2月7日(日)

平成28年の干支は「申」。
 大安場史跡公園では、猿にちなんだ三二展示を開催しております。今まで知らなかった猿のことを学んでみましょう。楽しい折り紙コーナーもご用意しております。

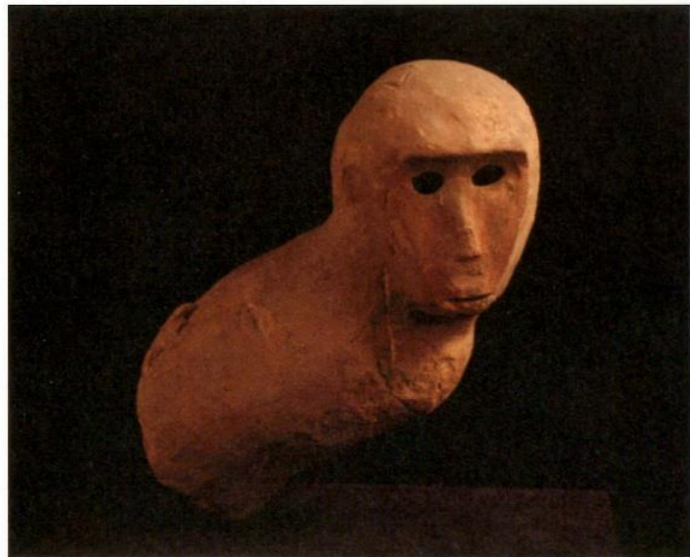


今年は申年

今年の干支は申です。「サル」は猿・猴・申といった漢字*があてられ、ことわざや歌・キャラクターなどで親しみのある動物です。みなさんはどんなイメージをお持ちでしょうか？

さて、干支と言えば私たちには「十二支」として12種類の生き物がおなじみですが、新年は60年で一回りする「干支」の33番目「丙申」の年となります。

*「猿」はテナガザルのなかま、「猴」はニホンサルやアカゲサルといったオナガザルのなかまを指すと考えられています。「申」については諸説あってよく分かっていません。



画像提供：東京国立博物館
 Image : TNM Image Archives

国重要文化財
 伝 茨城県行方市 大日塚古墳出土
 長 21.9cm 高 27.3cm 古墳時代(6世紀)

考古資料にみるサル

「申」または「猿」に関する資料としては、茨城県行方市大日塚古墳から出土したと伝えられる1907(明治40)年に東京国立博物館に寄託された埴輪が有名です。

同博物館のweb「e国寶」によれば、「両手と下半身を欠失しているのもともとの形状は詳らかでない。」としながら、「背中に大きな剥離痕があることから、この部分に子猿を背負っていたと思われる。顔をやや横に向けていることから、背中の子猿のほうに少し顔を向けていたと考えられよう。」と、単なる猿を模しただけでなく親子の姿を写した資料と紹介しています。さらに、首輪や鈴などの飼育に関わる造形がないことから野生のサルを表現している可能性があり、この点でも非常に貴重な埴輪です。

このサルの埴輪が出土したと伝えられる行方郡については、8世紀前半に成立したとされる『常陸国風土紀』で、郡の南に位置する男高や麻生の里に猿や猪が住んでいると記述しており、霞ヶ浦東岸地域が北の行方郡に対して自然が多く残っていたことが分かります。

くらしの中のサル

くらしの中での身近なサルといえば、「サルも木から落ちる」「猿真似」「猿知恵」などの言葉があります。また、「猿神」「猿の生き肝」「サルカニ合戦」などの昔ばなしに出てくる動物としても知られます。自然の中では「サルスベリ」「サルノコシカケ」といったところでしょうか…まだまだありそうなサルですが、なんだかあまり良い意味での登場が少ない気がします。この理由について、民俗学や国語学の分野でい



「参道右のサル」



「参道左のサル」

いと研究されていますので、興味のある方は調べてみてはいかがでしょうか。ここでは、サルの名誉挽回(?)としまして、「神のおつかい」としての姿をご紹介します。

いきなりのサル登場でびっくりした方もいるかもしれませんが、市内富久山町の日吉神社にいるおサルさんたち*です。日吉や日枝・山王といったお宮では、サルが神様のおつかいとされ、こま犬と同じように参道の両脇に配されることがあります。ここで注目すべきは左にいる子猿を抱いた姿でしょう。冒頭でご紹介した埴輪とは時代差がありますが、サル親子の情を示す動物として愛でられているのですね。

*「昭和三十三年十月一日建」

